

カッパ塾 第2期

第3回例会

「背振の山岳信仰」

講師：長野 覚（ただし）先生

講義記録

資料：「背振の山岳信仰」資料 日本山岳修験会顧問 長野覚
写真資料（パワーポイント・ファイル）

日時：2012年（平成23年）10月27日（土）14時～16時
会場：入部公民館

カップ塾 第2期

第3回例会 日時：2012年（平成23年）10月27日（土）14時～16時

会場：入部公民館

内容：「背振の山岳信仰」

講師：長野 覚（ながの ただし）先生

（日本山岳修験会顧問 長野覚）

<ふるさと早良会 越智会長あいさつ>

ふるさと早良会とカップ塾の共同での開催になります。早良の私たちが勉強しなければならない肝心なところである、早良の山の状況を勉強できる貴重な機会となると思います。今日はしっかり勉強して帰りたいと思います。よろしく願いいたします。

<長野先生紹介>（玉井輝大より）

長野先生とは、経歴の中に書いてある修猷館での出会いです。直接習ったことはなかったと思うのですが、私たち生徒の間でも、長野先生は、英彦山の山伏でいらっしゃるとの話はどこからか伝わっておりました。

背振に関しては、小学校の校歌の出だしが、「背振の峰を仰ぎ見る、明るい窓の明け暮れに・・・」であり、中学校の校歌が「南にそびゆる背振山、気高き姿仰ぎつつ・・・」でした。これが私の背振との出会いです。そして、早良にすむようになって、みずべ環境を良くしようと取り組んできました。そして、ふるさと早良会さんで早良の農業のことを学びました。そのうちに、もともと早良の原点として、水と山というのがあると思うようになりました。

同窓会で先生とお会いした時、先生に英彦山と背振が関係するような話がありますかと、おうかがいしたところ、ありますよ、ということでした。それで、1年ほど前から、お話しをして、今日のこの場に至っております。

いまは日本山岳修験学会の顧問をしてあるのですが、もともと、福岡県内の求菩提山、英彦山、宝満山などの研究者によって西日本山岳修験学会ができて、それから、全国組織の日本修験学界に発展したという経緯があるそうで、事実上、日本山岳修験学会の生みの親でもいらっしゃると思っています。長野先生よろしく願いいたします。

<長野先生の話>

ふるさと早良会の皆様、カップ塾の皆様、長野でございます。よろしく願いいたします。玉井さんは修猷館でも優秀な生徒さんでした。教室の隅のほうで、目をくるくるとさせて、わりあい明朗活発で、とてもいじめの対象にはならない、むしろいじめるほうだったかもしれない、そういう生徒さんだったかもしれないと思っています。

私は、背振山自体を研究調査したことはあまりない。英彦山からはじまって日本全国の主な山を研究したのですが。今回、背振ということで大急ぎで資料を作ったわけですが、私も勉強になりました。おそらく背振の細かい歴史とかは地元の皆様方が一番よくご存知ではないかと思います。私のほうが教えていただくことも多いかもしれませんが、この資料を中心に話をさせていただきたいと思っています。

私たち日本人は経済成長をとげまして、格差はありますが、豊かな生活を送れるようになった。しかしながら、反面、広く世界に商品を生産供給することで資源を乱獲しておりますし、環境の汚染が生じています。それにも増して、人心の荒廃というものが目立つ、絆がなくなってきている。現在、世界の人口は約70億です。19世紀にドイツの地理学者が200年も前に、地球の限界人口は70億だと計算していますが。その限界にいま到達している。それで、貧富の格差、最近では宗教、民族の対立が、はげ

しくなっています。20 世紀で植民地争奪の歴史が終わって、経済的なものももちろんありますが、表面的には宗教、民族の対立が国際的には大きな問題となっています。

翻って、日本国土を省み見ますと、魏志倭人伝の時代から、「倭人は楽浪（朝鮮半島）の東南、大海の中に在り、山島に依りて国邑をなす」といあり、国際的にも3世紀弥生時代の当時から日本は山国、島国という認識があったわけです。国土面積の3/4が山地丘陵。わずか1/4の平地部に現在の日本1億2千万人の9割が集中している。生産流通消費という循環が平地部に集中した国土は、気象条件の変動、あるいは、災害などに対して極めて脆弱なものになっていると思われま。

一方、4分の3を占めます山地は、ご存知の通り、過疎化に伴います、住民の高齢化と孤独化という大きな社会問題となっており、都市と山村が遊離した現状になっております。山の存在というのは河川の水源であり、つい最近までは、建築用材や薪とか木炭などを供給していた。貴重な地域資源として長い歴史を持ってきました。この水、薪、木炭という、火と水は人間生活の根幹であり、それらが山によって供給されていたということが忘れられて、現在では山は交通の障害になるというような感覚になってしまっております。

この福岡市の中でも旧早良郡、資料の右側に明治20年代の20万分の1の地図（約1.2倍に拡大していますが）、これは日本で一番古い、全国で初めて20万分の1のスケールで作られたものでございます。これをみると早良郡には能古島も入っておりますし、大濠も入っているのです。海と平野と山という3つの貴重な自然を早良郡は備えていたこととなります。

しかしながら、早良地域だけではなく、筑前の国全体を見ると、どうも顔の正面は博多湾、あるいは、玄界灘。北のほうを正面のように向けている。それで背振というのは背後、後ろというように認識している。表と裏という感覚があったのではないかと思います。従いまして、背振に関して、筑前の人、背中の“背”、背後の“背”を書きます。それに対して、肥前の人、佐賀県側は、脊梁の“脊（せき）”。これは、漢字語源の辞典であります「字統（じとう）」を調べてみますと、“背”と“脊（せき）”は意味が違。 “背”は単なる背骨なんですが、“脊（せき）”は骨だけではなく筋肉まで含んでいるそうです。だから、肥前の人、脊振というのを非常に重要視している。表と裏という感覚から言うと、肥前の人、脊振の方に顔を向けておる。それはなぜかという、九州最大の佐賀平野は、潤沢な水が無ければ、稲作はできませんし、その規模が、筑前の平野と比べるとまったく広さが違う。

吉野ヶ里に行くとき真北に脊振の山地が見えるのです。弥生時代の人たちは、朝な夕なきとあの脊振を、水を供給してくれるところという崇敬の念で仰ぎ見ていたと思います。そういうことが吉野ヶ里の史跡の説明の中には全く触れられていない。ただ、平地のことばかりが書いてあるのですが。そういう訳で、肥前のほうは脊梁の“脊”を使っていたのだと思います。いまは混同してしまっていますね。

さてそういう背振でござりますが、この歴史につきましては、資料2枚目のプリントの左側をごらんになってください。これは、昨年2011年、発行されたものですが、「北部九州の山岳霊場遺跡——近年の調査事例と研究視点」という資料集で、北部九州の山岳霊場を非常にコンパクトにまとめてあります。これを説明すると1時間ぐらいかかってしまいますので、歴史の方は、山岳信仰の中で部分的に取り上げていこうと思っています。ただ、この表の真ん中のところの「縁起・伝承」のところ、大事なことが2つ抜けています。一つは、背振の語源になる伝承です。百済の国へ神功皇后が三韓征伐をしたその後、百済から、龍馬（りうま）、馬が弁財天(水の神)を乗せてやってきた。そして、神霊で馬の背をふるって、背振という名前が付いた、というよく言われる伝承が抜けています。もうひとつは、背振の神、これは、「日本三代実録」という六国史の一つで日本の正史の中に、背振の神が祭られているということが、9世紀の初めに出てきます。古い信憑性のある記事が抜けています。あとは大変よく要点が述べられていると思います。

さて、以上を前置きとさせていただいて、もう一度、1 ページ目に戻っていただき、左側のほうをごらんになってください。1 番目に、「山岳信仰の成り立ち」、2 番目に「修験道の峰入りによる十界修行と背振山」、3 番目に、「現代の峰入り——NHK.TV “ふるさとの伝承：山伏が峰々を行く”」これは英彦山の例でございますが、今日は DVD でお見せすることになっています。そして、4 番の「背振山の現代的存在感」、これは、結びに代わる提言です。背振というものを生かす、もっとどのようしたら生かすことができるのかの提言で、結びに代わるものでございます。

I 山岳信仰の成り立ち

まず、山岳信仰の成り立ちですけど、これは、原始的な信仰と神道と、神仙思想（道教）と書いてます。括弧して道教としているのは、道教はまとまった組織、あるいは教義として入ってきていません。じわっと民間信仰の中で入ってきていますので、思想という言葉にしております。そして、仏教です。これらが全部習合して、山岳信仰がある。習合はただ玉石混交の混交とは違うので、習い合せる、摺り合せる。摩擦が起こらないように、いろんな信仰が納得して共存する。これが習合なのです。博多山笠で、追い山ならしは、習合の習の字を使いますね。あれは本番の練習でしょう。ああいうように摺り合せる、トラブルやミスが起こらないようにする。あれと同じでございます。

そして、いま述べたことを私なりにまとめた略図が 2 枚目のプリントの右になります。おむすびのような形のものでございますが。まず、山岳信仰の底辺にあるもの、それは、原始的な信仰でございます。原始的な信仰・宗教というものは、原始的な自然崇拜（naturism ナチュリズム）、精霊崇拜（animism アニミズム）、巫呪（ふじゅ）信仰（shamanism シャーマニズム）。自然崇拜は申すまでもなく、人為的でないもの、自然にあるものを尊敬し、崇拜する。天体であろうと、地上のものでであろうと。精霊、アニマというのはラテン語の魂です。精霊、魂の崇拜。そして魂と交流できるというのが、巫女で代表される巫呪信仰ですね。こういうのが原始的信仰とされています。

I P S 細胞でノーベル賞をとった山中伸弥京大教授が受賞された翌々日に、NHKの「クローズアップ現代」で、国谷裕子アナウンサーが教授に、「発見されてわずか6年で受賞されて、大変スピーディな受賞ですね。」と言ったところ、教授は、「実は50年前のケンブリッジ大学の教授がカエルの皮膚を再現するという研究があったから、自分の研究があったのだ」と、おっしゃった。そして、「これからどうなさるのですか？」という質問に対して、「これから、早く広く、医学に応用して、多くの病気の人を救えるようにしたい」とおっしゃった。そして、アナウンサーが何も質問しないのに、「それが終わったら、25年前に亡くなった父と会いたい」と言われた。私はビックリしました。医学がそこまで行けば、自分はいつ死んでもいい。そしたら、なくなった父と、まさか、ノーベル賞をもらうような科学者が、形而上学的な魂のことをおっしゃるとは思いもしなかった。そういうように、原始的な信仰というのは人間のDNAとなって、ずっと伝わってきているという面があるのではないかと思います。

このように原始的な信仰は、特に自然崇拜とか、あるいは山中教授が言った祖霊崇拜のように神格化する。穀物の霊、穀霊、あるいは、水を配分する、水分（みくまり）崇拜など、そういうものを神格化して、儀礼とか祝詞（のりと）とかをつくったのが神道であり、日本民族宗教となっていると思います。

原始的信仰は縄文時代で、神道が芽生えるのは、水がどうしても必要な稲作が普及する弥生時代、ということになります。そして、日本の国家が形成され始める古墳時代になると、中国の漢民族の民族宗教であります神仙思想、道教がじわっと入ってきたようです。北方玄武、南方朱雀、東方青龍、西

方白虎こういうことが高松塚古墳の中に描かれている。神仙思想が入っています。仙人の思想です。その一つの理想は不老長寿。健康で長生きしたい。その神仙思想の根源は何かというと、万物の根源は「気」である。「気」は英語でエネルギー energy です。その「気」というものは、勢いがよいときは「元気」だ、何か患うときは「病気」だ、頑張れという時には「根気」だと。我々はもう、神仙思想の理屈など忘れてしまって、言葉として漢字の中で使っています。

その「気」は、陰と陽に分かれる。さらに、この陰と陽が、木火土金水、五行に分かれる。それらの組み合わせがバランスよくいく場合には、何ごともうまく行くが、どれかがバランスを壊すといろんなことが不都合になる。人間の身体も病気になったりする。というような神仙思想が民間信仰として残っていきます。

そういうような基盤の上に6世紀になると、世界的な哲理であります、現代の世界三大宗教の中の仏教が入ってきます。釈迦の教えであります仏教が、欽明天皇の538年に百済から入ってきます。やがて聖徳太子などによって、国の宗教として、日本に定着していくことになる。奈良時代は東大寺、あるいは国分寺の建立で分かるように、ほとんど都市仏教なのです。そういう時代でも、僧侶の中には、ただ寺の中で読経したり、説教を聞いたりするのではなくて、山で簡素な庵をつくったり、自然の岩窟で瞑想したりしたのですが。それが盛んになるのは、平安時代初期の最澄、空海の入唐によって、唐から持ち帰った山岳仏教（密教）です。比叡山（天台宗）、高野山（真言宗）に寺をつくる。山を修行の場とする。そこで、初めて日本の自然、山に神が宿るとしておったのに、神と仏が争わずに、もちろん、古くは蘇我と物部の争いなどありましたが、それが治まると、かなりスムーズに、ほとんど争わずに、本地垂迹（ほんじすいじゃく）思想として、インドの仏が日本では民衆救済のため神の形で現れる。これを権現といいます。なにに権現と言います。仮に現れる。ということで、妥協したといいますか、日本固有の神道と、外来の高度な文明、あるいは理論を持つ仏教と習合します。これを民衆に広めたのが修験（山伏）です。神仏習合のプロモーターとなったのが山伏、修験者であります。

そして、日本古来の神道も、仏教の影響を受けて、神社の建物や御神像が作られます。或は神体の鏡に仏像をつけた御正体が作られます。仏教はできるだけ大きな寺、堂塔伽藍、寺院、塔、仏像などを作っていきます。修験道ではそれに当たるものは何かというと、自然の山なのです。自然の洞窟、自然の樹木、あるいは、岩、川なのです。確かに、寺院とか神社も崇拜しますが、それが本拠ではないのです。本拠は俗世間から隔絶した山なのです。山に入って修行するのです。

II 修験道の峰入（入峯）について

では一体どういう修行をしたのか。それは「峰入」と申しまして、修験道の最も重要な修行のことで、神道であれば祝詞（のりと）が大事ですし、仏教では経典が大事ですが、修験道では経典がない。ないというよりも作らない、秘密なのです。文字で記録せず口伝（くでん）、口から口に、師から弟子に伝える（師資相承）。山の中で、山を修行場として。

どのような修行かといえば、3枚目のプリントの右下を見てください。役小角（えんのおづぬ）、7世紀から8世紀初めまで生存した実在の人物です。続日本紀という正史の中に記録されています。呪術で人びとを惑わせるので、伊豆の大島に流罪になった。このようにわざわざ、日本正史に書かれている。飛鳥・白鳳時代の著名な修行者です。この役小角が開いたのが大峰山。最初、葛城山で修行しますが、それで飽き足らずに、山の規模がぜんぜん違う吉野から熊野まで続く大峰山で修行しました。紀伊半島を縦断するその地域を総称して大峰山と呼び、大峰山という独立の山はありませ

ん。大峰山の山上ヶ岳はいまでも女人禁制の山です。修験道にとって重要な行場です。天台宗なら比叡山が本山、真言宗なら高野山が本山、本寺などありますが、修験道の場合の根本道場、霊場というのは大峰山です。

全国から集まった大峰山で修行した行者、山伏が全国各地の自分の国に帰る。そうすると日本は山国だからどこでも山がある。なんとか大峰山になぞらえて、習ったことを自分のところでも弟子に伝えていこうと、羽黒山、立山、富士山、木曾の御嶽山、四国の石鎚、伯耆の大山、九州であればこの背振山や英彦山、宝満、阿蘇、霧島とかに修験道の拠点ができつつあったわけです。それで、修行のテキストとして、手本として、大峰山でどういうことが行われていたかという、それは秘密だから、俗人には知らせない。今でも秘密なのです。とはいえ、大峰山の修行はマスコミが取材して、だいぶ知られるようになっていますが、羽黒山は、約10日間ばかりの修行の中、大先達に向かって、いま自分たちがやっている修行は、親子兄弟といえども、娑婆に出ても絶対に他言しませんという誓いを立てるのです。そういう修行ですので、なかなか内容が分からない。

ただ英彦山で行われていた峰入りの修行は、日光から来ました（阿吸房）即伝という修験者が英彦山で修行し、その後、加賀の白山に修行に行った。そしたら白山の行者から峰入りの修行について是非教えてくれ、書いて教えてくれと頼まれる。阿吸房即傳（アキウボウソクデン）は「絶対秘密だから」と断るのですが、懇願されて、遂に峰入りの内容を記録して残すのです。今から500年前室町時代の末です。それが唯一のテキストとなって、いまでも全国各地の峰入りの内容がそれに当てはめて分かるようになっていきます。

峰入りというのは、大峰に入るということで、背振で修行しても、あるいは英彦山で修行しても、修験道の根本道場であり、役小角の開いた大峰山に入るのと同じなのだということで、大峰入り、それを略して、峰入り、あるいは入峰（にゅうぶ）と言っているのです。

表1を見て下さい。ごく大まかに話しますと、彦山：1525年、大峰山：現在、羽黒山：現在、としてますが、中世に阿吸房即傳が遺した彦山の修行とあわせて表現しています。一番左の欄に十界と書いています。十の世界のことですが、四聖界と六道迷界に分かれています。どういうことかという、修験者達の修行というのは、この世で起こるいろんな現象を十界修行として自分が体験するのです。

表の左下から、1. 地獄、2. 餓鬼、3. 畜生、4. 修羅、5. 人間、6. 天上、これが六道迷界で、私たちの俗世界ではいろんなことに迷いがある。地獄の苦しみを味わう。飢え、世界中ではまだ何万人単位で餓死者が出ていますね。畜生、思うようにならない牛馬のように、自分の思うようにならない苦しみ。修羅、これは闘争、戦争などもそう、あるいは個人的な争いもある。

これらに対応する修行が、地獄は、業の秤。これはあとでNHK-DVDに出てきますが、罪の重さを計るために断崖に突き出して吊るす。餓鬼は、断食です。飢えた人の気持ちを自分が味わうのです。畜生では水を断つ。修羅は相撲を取らせる。この相撲は素っ裸です。いまの相撲はまわしをつけていますが。古代ギリシャのオリンピアも全部素っ裸ですね。ですから、女人禁制です。スタジアムの中にも入れませんでした。それは古代オリンピアの図を見れば分かります。

す。日本でも明治維新前まで、素っ裸で相撲を取らせていたのは英彦山の峰入りですね。いま、羽黒山で相撲ではありませんが、素っ裸でする行があります。こんなこと大体は言ったらいけないのですよね。秘密ですから。(笑い、「儲かったな」との声も)つい言ってしまいました。もうバチが当たっているのかもしれないですね。そして、人間として懺悔するのです。いろんなことを懺悔する。しかし、人間の世界というのは苦しみばかりではありません。六番目は天上界です。これは延年(えんねん)の世界です。演芸ですね。能を舞ったり、管弦、唄を歌ったり。それも、修行の中。このように、この世で起こる喜怒哀楽を全部、修行として体験する。いまは一週間ぐらいの修行ですけども、明治以前は50日前後です。山で峰入りをしながら行いました。

六道迷界の修行が終わりますと、ようやく悟りの世界に入っていきます。声聞(しょうもん)、縁覚(えんがく)、菩薩、仏、と。普通、神道であれば、神にお祈りをする。仏教であれば仏におすがりする。他力本願なんです。修験道の場合は自力本願なんです。おととい亡くなられた役者の大滝秀治さん、あの方の録画がでていたのですが、凄いことを言っておりました。「役者というものは、物なり人なり、対象になってしまうことなのだ。真似をするのじゃない。それを客の前で発露するのだ」と。これは修験道の心と同じです。神仏になってしまうんです。即身即仏といいます。これが最終目的。神仏になってしまって、そのパワー(験力)でもって民衆を救済する。これが、神道・仏教とはちょっと違う。仏教の場合は死ななければ成仏しない。神道の場合も死ななければ神になれない。修験道では生きながら仏になる。即身即仏(即身成仏)と言っておられます。これが、十界修行でございます。

修行はそう簡単にはいきません。大先達になるためには、江戸時代に英彦山で9回以上の峰入りをしなければならなかった。さらに大先達の長老になるためには36回峰入りをしないと決まっていた。私は大峰山で3回、羽黒山には2回峰入りしました。羽黒山から帰ってきたら、女房が「おっ、神々しくなっている」と言われました。ビックリしました。私は神々しくなるなんて思わずに修行に行ったのですが。峰入りの効果でしょうか。そういうこともありました。しかし修行を続けていませんから忽ち凡人になってしまいました。

さて、このような十界修行が背振山ではどのように行われていたかということですが、一枚目のプリントを見てください。黄色いマーク8つが、脇山八郷(曲淵、石釜、西、内野、脇山、小笠木、椎葉、板屋)と呼ばれていて、背振山東門寺の領地だった。早良というのは東門寺の領地だった。あるいは神領、寺領だったと言っていい。先ほど申しましたように、神領と言っても、寺領と言っても、修験道の行場になったときは、神は仏であり、仏は神であるので、表裏一体ですので、神と言っても仏と言ってもいいのです。赤い丸印は、この場所、入部公民館を示しています。青い点はいつの時代か分かりませんが、古い時代には背振山神領というのは、こんなに広がった。東の方は通古賀。北の方は塩原、竹下あの辺り。重留の境になにか梵字の石が残っているのですか?何かそういうものがあるということです。西の方はえらく離れて唐津の鏡、鏡山ですかね。資料自体がしっかりしたものではないのですが、いずれにしても早良の脇山八郷というのは背振山領であったということでございます。

背振山の峰入りも、秘密でしたので、なかなか古い資料がありません。江戸時代に一度断絶したらしいのです。中世から近世の過渡期に、背振だけではなくどこでも、戦乱で、周辺の豪族から焼き討ちされたりして、修行などできなくなってしまう時期がありました。そして、江

江戸時代に再興したらしい。この図のグリーンでルートを入れておりますが、丹念に調べていけば、ちょっと違うかもしれません。数字は何かというと、左下のほうに大きい丸で「一」があります。これは、佐賀県の牛尾山（うしのおやま）、牛津という地名が有明海岸にあります。小城町の郊外に、牛尾山という 100m ぐらいの丘陵なのですが、ここが峰入りスタートなのです。

3枚目のプリントをご覧ください。そこに肥前修験道の峰入りの行場が書いてあります。ここに書いている番号と合わせて、地図の上に丸と番号を書いています。1は牛尾山。密教で言います金剛界と胎蔵界が出てきます。寺院であれば理屈だけで、お寺の中で説教するわけですが、修験道の場合は、それを自然の山で行う。仏教の釈迦仏までを包容してしまうような大宇宙神、これを大日如来と尊称し、その教令転身の不動明王が修験道の最高神です。密教の大日如来には2つの大きなパワーがある。一つは胎蔵界。母体のように生命を育てる、はぐくむ力があるもの。もう一つは金剛界、これは邪悪なものを破壊するもの。そういう育てるプラスと、破壊するマイナスの二つのパワーを大日如来は持っている。

それで、牛の尾山から背振までのグリーンの峰入りのコースは胎蔵界、あらゆるものを育てるというパワーを発揮する行場です。胎蔵会の中心は背振山です。図から外れていますが、肥前の多良岳というのが佐賀県と長崎県の県境にあります。この多良岳が金剛界の中心です。ずっと多良岳まで峰入りしたのです。しかし、江戸時代には距離も遠いし、多良岳への峰入りはほとんど行われなかったそうです。一方、胎蔵界、背振への峰入りはしばしば行われたということです。

峰入りでどうゆうことが為されたかということ、3枚目のプリントをご覧ください。下の右の欄です。これはいろんなところで使われる呪術の「九字」です。臨（りん）、兵（びょう）、闘（とう）、者（しゃ）皆（かい）、陳（ちん）、烈（れつ）、在（ざい）、前（ぜん）。道教の基本的な呪術です。これがほとんどそのまま取り入れられている。九字をきると言います。「臨兵闘者皆陳烈在前」と唱えて、山に入っていくのです。いろんな困難に直面した時にもこの呪術を使います。

富士山の調査で山梨県に行った時、山の中に小さな会社があったのですが、その入り口にこの九字が縦に書いて貼ってある。こんなところになんで道教とか、修験道の言葉があるのだろうと思って、入って行って会社の幹部の人に聞いた。そしたら、これは社長の訓示で、意味は日本的に読んでみると、「兵（つわもの）が闘いに臨むは、皆、陣列の前にあり」。つまり戦うものは後ろのほうで指図してもダメだ、全部陣頭指揮だ、とこういう意味にとったと。そして、それを社訓として、一人ひとりそのつもりでやれとのことなのだと教えてくれました。これを修験道は取り入れています。だから、道教思想も日本には入っているのですね。

全部は説明できませんが、3枚目のプリントの真ん中より少し右のところに、第一牛尾山（うしのおやま）とあります。この山は、金剛界と胎蔵界が合わさったところにある。胎金合一の場です。その左の行に、東は胎蔵界、つまり背振山。西は金界、金剛界がある。ここのすぐ左の行に、「即ち此ノ山中ノ大宿ニ駈入り一七日或ハ三日逗留シ」とあります。ここの一七はじゅうひちにち、ではなく、いち・ひちにちと読んで、七日間、或いは三日間、中世は七日間、近世は三日間は逗留し「大柴燈（だいさいとう）ノ護摩」とあります。普通は天台や真言の寺

院でたく護摩というのは、内護摩といって部屋の中で護摩をたきますね、ところが修験道の場合は外護摩といって、野外で薪を、きちんと規則にしたがって、煩惱焼滅の護摩を焚きます。それを行う、ということが書いてある。

それから、四番目の金剛山のところを見てください。「清水ノ山中西谷ノ内 此ノ山ニ於イテ七日断食」をするとあります。七日間の断食をしたのです。このようにいろいろな十界修行が峰入りの中で行われたということがわかります。また、秘密に行うのだということの記述もあります。一番下に地図がついています。肥前国峰（こくぶ）二十八箇所行場。背振山の峰入りに関してそんなにたくさん論文はありませんが、それらを見ると全部この図しかない。ところが、この図はどこに何があるか全く分からない。それで私がいろんな地図を照合して何とかつくりました。今日に間に合わせるため、ゆっくり時間がなくて、たぶん修正しなければならないだろうと思いますが、凡そこのコースで牛尾山から背振山に行って、また戻ってくるという、峰入りが行われていたのだろうと思います。

それでは、一体今の峰入りではどのようなことがなされているのか。英彦山の例でお見せしたいと思います。NHKの「ふるさとの伝承」というDVDです。

（みんなで見始める。以下、見ながら先生からいただいたコメント。）

- ・自然の洞窟などあればそれでいいのです。
- ・これは太宰府の宝満山の峰入絵巻です。行人は13歳から、20歳前後の人が多いです。
- ・断食しながら歩きますから疲労困ぱいしています。
- ・まだ若かったです。（長野先生がビデオに出ている）
- ・秘密のところは「口伝」として詳しいことは書いてありません。
- ・背振では、花乱滝、坊主滝が同じように水行の場ですね。

（玉井：今日の資料の中で「背振の山岳信仰」というのをつけています。この中で、峰入り修行がやられたのでは、やれるのでは、というようなところの写真をつけています。背振の中でもいろいろとそんな場所があると思っています。特に、2ページ目の鬼が鼻では、下をのぞくのが怖いようなところで、きっとここで「のぞき行」が行われたのではないかと想像したのですが。）

- ・頭につけている頭巾（ときん）が水をすくうコップ代わりになります。
- ・江戸時代までは素っ裸で相撲をとらされていた。
- ・62歳で平戸から参加の方もいます。

（玉井：40分のビデオを30分ぐらいにしてお見せしました。切った10分も切りがたいものだったのですが。）

どうもありがとうございました。ビデオの中で少年が泣き出したのは、後で分かったことですが、胎内くぐりをしたときに、亡くなったお母さんと会ったとのこと。こういうのは科学的でないかもしれませんが、本人にとっては会ったという。精霊の世界をのぞいて見ることができた、ということだったらしいです。そういう少年の心情を聞くと涙が出てしまい

ますね。

それでは最後、急いでまいります。1枚目のプリントを見てください。一番下のほうです。私は、この背振山でかつてこのような峰入りが行われていたということから、提言してみたいのですが、背振の存在というのは、「癒しの山」として活用できるのではと思います。まず、1000mを超える天上界の自然がある。地形とか、景観とか、動植物の変化というのは、とても平野では見られないものです。福岡市の郊外、日帰りでもできるようなところにある。自然の宝庫であると思います。

それから、これが忘れられています。日本の六弁天の一つなのです。山岳では、背振山、大峰山の弥山（みせん）。島では宮城県の金華山、広島県宮島の厳島、滋賀県琵琶湖の竹生島、相模湾の神奈川県江ノ島です。この中で弁才天信仰が忘れられているのは背振山だけです。後はみんな多くの人が参拝しています。多くの人が集まっています。そういう信仰の原点があるのに、背振は忘れられてしまっている。これはもったいないと思います。

大峰山の弥山の麓に河上弁才天（天河大弁財天社（てんかわだいべんざいてんしゃ、天河神社））があり、そこで今年、日本山岳修験学会の大会があったので行きました。会員みんなで弁才天にお参りしました。そしたら、その宮司さんが、お払いをしてくださるのですが、まずお払いをします「かけまくもかしこきイザナギ、イザナミノの大神 筑紫の日向の たちばなの 小戸の・・・」と終わったかと思ったら、「かんじざい、ぼうさつ はんにゃはらみた ぎゃーていぎゃーてい はらぎゃーてい はらそうぎゃーてい ぼうじそわか」。それがおわったら、「おんころころ せんだり まとうぎそわか。 なうまーぐさ まんだー」。宮司さんが、祝詞も、般若心経も真言も言うのですね。これが、本当に神仏分離以前の日本人は神仏習合の気持ちだったわけですね。私たちは、初詣でも、お寺にもたくさん行きますし、お宮にも行く。いずれにしても、背振の弁才天信仰は心の癒しの場として復活していいのではないかと思います。

2番目に、山岳信仰文化遺産として、社寺、祭礼、石造物、遺跡、古文書などいろんな文化財があるはずですが。現在それが非常に少なくなっています。忘れられています。次に、心身の練成による六感のリフレッシュ。これが峰入り。部分的に少しだけでもいいので、どこからでもいいので復活できないか？ 六感と言うのは、般若心経にあります「眼耳鼻舌身意（げんにびぜつしんに）」です。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、それを全部統合した心。この六感が、いま人間では失われている。峰入りすることでたしかに感覚が鋭敏になります。ただ、俗世界に戻るとまた、鈍ってしまうのですが。少しだけでも鋭敏になるという時間があるということは嬉しいことです。こういう体験をする場が背振山にはあると思います。

もう一つ、山と山里の食文化の再認識と育成。これも、可能ではないかとおもいます。今朝の西日本新聞に大嘗祭で主基（すき）斎田が脇山でなされたとありました。それで、お田植え舞いなどなされているということなのですが。これはブランド米にしなければ勿体ないと私は思います。佐賀関の関鯖のように。そういう価値があると思います。そんなことをしてはバチが当たると思われるかもしれませんが、それは思い過ごしだと思います。

これは太宰府でつくっている醤油です。太宰府の観光協会がブランド化してる宰府の醤油。

あそこは皇居に塩を献上しているそうです。その塩でつくった醤油とのことです。この小瓶一本が 800 円です。一年に何百本かの限定だそうです。この「脇田八号」というのはブランド米にしなければもったいないですよ。

次に山葵（わさび）です。これは 2 つの栽培のタイプがあります。一つは信州安曇野型で、きれいな清流に石畳のようなのを作って栽培する。といっても天然わさびなのです。高価ですよ。自然の山葵は、背振山の南側、肥前側じゃ不利です。筑前側だったら北斜面で、水が豊富です。もう一つは、あまり手を入れない本来の方法で関東山地の奥多摩タイプです。自然の山の川に少しだけ水をせき止めて、栽培する。私は驚きました。エアコンを 5、6 年掃除してなかったのが業者で頼んで掃除したのですが、そしたら、こんなものを使っていました。「わさび防カビパック」というのが入っていました。少し品質のよいのに入っているそうです。山葵はものすごく殺菌力があるのです。

玉井さんがなさろうとしているこの背振の“百士”学舎で山葵栽培をなさるといいのでは。山には所有権があるので、所有者と話し合っただけで作ったら。そしたら名物になりますよ。宝満山には天然のものがあります。修験の山というのは全部わさびがあります。いまNHK大河ドラマで後白河法皇が出ます。法皇が平安末期に梁塵秘抄で当時の流行り歌を全部編集しています。そのなかに、「ものすごき山伏の好むものは、凍てたる山芋（自然薯）、わさび、かき（カキ）を水に浸したもの・・・」。これらは山の谷水筋にできるのです。そういう、産地に背振の筑前側だったら適しているのではないかと思います。

柚子胡椒、これも有名になりましたね。そのルーツは英彦山の山伏達が自家消費していたのです。昭和 30 年代に、南極越冬隊がはじまりました。全国に物資の寄贈を呼びかけたのですが、そのとき、英彦山の林光美さんが柚子胡椒を送ったのですよね。それが越冬観測隊の方に評判が良くて、第 2 回目は氷が厚くていけなかったのですが、第 3 回目の時に 30 本寄付してくださいと茅誠司委員長の名前で要請があって、それから、商品化して、いまは広辞苑まで柚子胡椒は載るほどになっています。元祖の柚子ごしょう一瓶を玉井さん上げましょう。（ありがとうございます。）

そういうことで、修験の山には、山葵とか柚子胡椒とかがあります。それから、求菩提山で成功したのはモロミ漬（求菩提漬）です。求菩提資料館の重松敏美館長さんが、小倉の井筒屋に出したら評判が良くて、いま求菩提山の名物になっています。日本全国に行きますと、相模大山にはずらっと豆腐料理屋が並んでおりますし、大峰山の山麓の登山口のところでは、コーヒー店がたくさん見られるのです。どうしてかと聞くと、水がいいのでコーヒーの評判がよいとのことでした。

この脇山郷というのは背振に向かって、修行の行場としても、食文化としても、そしてブランド米としてでも、いろいろ活力の持てる地域ではないかと思っています。以上で終わらせていただきます。ご清聴いただきまして、ありがとうございました。（拍手）

先生どうもありがとうございました。最後は柚子胡椒までいただきまして。ここで、「グラフふくおか 2010 秋号」を回させていただきます。ここには、先生の顔写真入りで「英彦山 山

伏弁当」というのが紹介されています。DVD の中でも、山から下りて里との関係のようところがあって、改めて密接に我々の生活も、修験を通して豊になってきたのだなと思いました。

少しだけ質問を中心に皆さんとの意見交換をやりたいと思います。その前に、「背振の山岳信仰 資料」を見てください。背振界隈でこれだけのものがあるよというのをざっと紹介させていただきます。1 ページ目、下の背振の山岳信仰というのは、背振山頂付近にあった説明板で、先ほど先生もおっしゃってあった「竜（馬）が背を振り背振山」など、いろいろいわれが書いてありました。次が「背振山頂」の写真です。遠くからはドームを見て山頂と分かるのですが、山頂に行くと、例の六大弁天様がドームと一緒にある。これはいかななものかなと感じます。次は「鬼が鼻」ですが、恐る恐る這いながら岩の上に行きました。そしたら、岩の上に金具が打ち込まれていました。多分ここで覗き行が行われていたのではと思いました。次は「靈仙寺」の写真です。東門寺は山頂にあったのですが、その中宮ということで、背振全体が東門寺の社領だったことが分かるように、靈仙寺跡というのが整備されていました。いってみると、パワースポットのような感じがしました。1 時間ほどそこにいたのですが、何か体が元気になったような感じがしました。僧坊がたくさんあったところですよ。「修学院」というのは、東門寺、靈仙寺と下って、これが下宮になるとのことでした。

「円珠院」は私が居合いと出合ったところなのですが、先生がおっしゃられたように山岳信仰で重要なお不動さんがいます。護摩炊きがあり、ことなし祭りといって、数珠をみんなで回すような祭があります。次が、「背振神社」ここにもお不動さんがいて、11 月 3 日午前 10 時から大祭がある。護摩行があり、火渡りもあるとのこと、行ってみようと思っています。次の「横山三社宮」というのが、東門寺所領である脇山の総本山ではないかと思っているのです。ここの氏子総代の馬男木さんに私はいま居合いを習っています。次の「池田城」は、ふるさと早良会で案内していただいて、初めて出会ったところですよ。次の「大教坊」は荒平城陥落の時寝返った坊さんなのです。長野先生にも見ていただいたのですが、この墓は「山伏の墓らしいもの」だと言われました。坊という言葉も名前についていますので、そうじゃないかと思いました。ここには大日如来さんがいらっしゃいます。鳥居には「大日尊」と書いてあったのですが、これは神仏混淆ではないかと思いました。そして、大教坊の墓の横に、名もないお地藏さんみたいなものがあるのですが、これは祀られた大教坊ではないかと先生がおっしゃってました。

「花乱の滝」は花乱という行者が修行したところだと、これははっきりいろんな資料に書いてあります。滝の近くには修行のための小屋のようなものもあります。次は「坊主が滝」これは、名前の通り坊主ですね。次は、「十六羅漢」これは線刻でほとんど分かりづらいのですが、よく見ると羅漢像がたくさん彫ってあるという大きな岩です。最後は、すでに紹介させていただいた「山伏弁当」の紹介記事です。

そしたら、ご質問やご感想なりをいただけたらと思うのですが。

（木村友則？）佐賀と福岡の境界争いで負けたのは、きょうの話を聞いてなるほどな、と思いました。福岡の方はあまり背振のほうを大切にしていなかったから、佐賀のほうはきちんと準備して、いろんな資料を出して取り組んだからかなと思いました。そういえば、つい最近テレ

ビのニュースで背振の素粒子の実験場をつくろうという運動が紹介されていたのですが、それも佐賀県が中心に動いているようです。

(阿部洪太郎) 修験者にとって経塚というのはどういう存在であったのかお聞きしたいのですが。

(長野先生) おそらく経塚は特に北部九州では12世紀から13世紀が一番盛んだった。平安の後半です。末法思想を契機にしているといわれています。経典を守るとともに、タイムカプセルのようにして、聖なる場所に埋納する。そして、極楽浄土に往生し、子孫繁盛を願うということが流行するわけです。そういう場合、必ずしも山ばかりではなくて、大宰府近郊の武蔵寺あたりにもあります。けれども、山に持って行くことが非常に多い。その頃は修験者というのは、開祖といわれる役小角が祀られているところを見れば分かるのですが、決して山頂のトップには祀られていない。トップは神様か仏様かがあるのですが。ちょっと低いところにいるのです。大峰山の場合でも、蔵王権現などがあって、その下のほうに、同じお堂でもちょっと低いところに役小角が祀られているのです。ですから、神、神主があって、そのあと僧侶が来て、宗教的な支配をするわけですね。修験というのはむしろ、そういう寺院の下働きとか、神社の下働きとかする地位に最初あったと思うのです。ただ、実際に自分が峰入りなどで実力をつけてくると、特に中世は武力の時代ですので、力を発揮して上に出るようになるのですが。ただ、経塚を作った頃は、修験はむしろ経塚を守るとか、あるいは経塚をつくる造営者になるなどしていたのではないかと思います。発願の貴族や僧侶や神主が実際に鍬を持って作るとかはないと思います。むしろ修験者みたいな下働きの者が造営したのではないかと思います。造営すると、それを守護するという仕事も持ったのではないのでしょうか。ほおって置くと荒らされたりする訳ですから。

(木村眞昭) たいそう興味深く聞かせていただきました。弁財天もインドからの神様ですが、仏教が伝わって土着化する過程で、当然、神仏習合、本地垂迹という形で日本には民衆レベルで定着していくわけですが、鎌倉時代の新しい仏教の祖師たちは別として、そういった中で、神仏分離令が、明治新政府によって発布されて、自然発生的に民衆のレベルで定着していた山伏信仰というのが、暴力的に廃棄させられた。太宰府天満宮にも安楽寺という寺がありますし、どの寺も、浄土真宗以外は、全部神仏習合ですよ。安楽寺は機を見るに敏だったのか、さっさとお寺を捨てたらしいのですが。そういうなかで、当時の宗教事情を勉強すると、「淫し邪教」、淫らな祀り方でよこしまな教え、という言葉が出てきます。日本が近代化していく、欧米列強のようにモダンな思想や技術で国力を発展させていかねばという時代の中で、犠牲にさせられた、一つの宗教界だったのではとおもうのですが。

それは本当に暴力的に政治的に衰退させられた。だから、英彦山に登ると、左右にあれだけ坊があったんかと、びっくりします。それが、暴力的に政治的に力づく排除させられたのですが、日本人の体の中に流れていたのですか、エコブームも関係しているのかもしれませんが、あのように復活している。いまさら、戦後は信教の自由の時代ですので当然なんです。近代以後の150年ぐらいの宗教の流れの中で、単に過去の紹介だけではなくて、今日の自然と共生しなきゃならない時代の中で、昔と同じような形での復活はできないとは思いますが、もう少し、本来の人間の自然な形でその精神なりが復活できたらいいのではないかと思います。一度壊れた聖護院を中心とする修験道の教団というのが、そういう発信をされているわけではないのでしょうか？

(長野先生) 自然との共生というのは、寺院でも、神道でもあります。だけど、特に修験道の場合にはそれが強く意識されていると思います。江戸時代に、神主たちというのは僧侶の下におかれていた。人別帳などを管理するために寺院が保護されて、神社は下に置かれていた。人別帳を管理するという村役場の戸籍係のような役をしていたわけですから、幕府の重要な組織の末端を担っていた。明治維新での神仏分離というのは、明治政府として、幕府と結びつきが強い寺院と縁を切らせるため、神道を国教化する。国の宗教化する。ですから、官幣社というのは国家公務員です。終戦前までは、国幣大社とか中社とかは、地方公務員です。国や県が給料を支給していた。それほど保護した。京都とか奈良とかの大きな力を持った寺院は別として、神仏習合していた修験道の寺院が一番犠牲になった。そして明治5年には、修験道廃止令まで出た。それから、権現という称号は使ったらいけないとまでなった。背振権現とか英彦山権現とかいう言葉は使ったらいけないとなった。そこまで、法難と言っていいほど、神仏習合を政府は宗教政策として分離してしまった。だから修験道は衰退してしまった。第二次大戦後の宗教の自由化のなかで、やはり、神仏分離というのは日本の文化政策の中で最大のミスである。いろんな寺院がつぶされたり、仏像が壊されたり。宝満山では、地蔵さんの首がみな折れてしまって、いまそれを接いだりしていますが。そういうことは大きなミスだと反省されていますけど、どうしようもないですね。ただ、修験道の霊山ではやはり、再び修験道を復活したいということがだんだん出てきているようです。

(玉井) 早良では資料「背振の山岳信仰」p.4で紹介している「円珠院」さんには、お不動さんがあって熊野三社があって、お話しを聞くと、とても面白くて、長野先生もご案内させていただいたのですが。早良には、修験道はまだ生きているのではないかと感じます。これがこの地域の隠された力ではないかと思っているのですが。

(河野照美) 求菩提山には修験者の資料館がありますね。福岡県には外に修験者の資料館はありますか？

(長野先生) 英彦山にも修験道資料館があります。だから2箇所あることになります。あとは全体の宝物館の中で、例えば太宰府天満宮では一部宝満山関係のものがありますが、修験道だけに絞ったところはこの2箇所だけだと思います。

(河野照美) 添田公園があって、岩石城があって、あそこから階段がありますね。あそこも峰入りの入り口なのではないでしょうか？

(長野先生) そうです。あれは、さっきビデオであったように、英彦山の場合は、秋は福知から山伝いに英彦山へ行く峰入りがあり。春は英彦山から馬見山や古処山を経て宝満まで来るのです。宝満の山伏は秋に、宝満から英彦山へ行くのです。春は犬鳴きを通過して、宗像の孔大寺山まで行って、帰りは里道を通って、福岡城で黒田公の前で採燈(灯)(さいとう)護摩炊きをやって帰っていた。そんな修行をやっていた。

(坂井智明) 福知山も3回登ったし、英彦山も3回登りました。登るだけで十分修行になると思いました。(笑) 2つ登ると思うと大変ですね。

(長野先生) やっぱり、修行と思われなければ、ならないですね。

(坂井智明) 山単独で日帰りで福知山は3回、英彦山も3回登りました。3つ峰がありますけど。そして、途中山伏さんの集団に出くわしましたね。

(阿部洪太郎/村上敦?) ちょっと思ったのですが、峰入りのところで、最後のところで生まれ変わりの行がありました。キリスト教もバプテスト、水に漬けて、生まれ変わるということがあって、よく似た考え方かなと思いました。

(木原二郎) 根っこはおなじじですよ。4、5千年単位で見れば。般若心経も原語はサンスクリット語でしょ。ノアの箱舟と同じで、あの辺から分かれて行って、ゾロアスター教に行くと、それからユダヤ教、キリスト教、イスラム教、そして北伝仏教と行って、あのあたりで枝分かれしています。そのときの共通項の思想というのは般若心経で、気とかいうのは息で、風とか霊とかに訳されることがあります。そこで、峰入りで出てきたような、お父さんお母さん敬いなさいということなども、山に登って、モーゼがシナイ山で授けられた戒めですよ。だから全部世界宗教のルーツの流れを汲んでいるのではないかと思いました。

(長野先生) そうですね、世界宗教は山でいろいろ啓示を受けていますね。モーゼの十戒にしても、イスラム教のムハンマドも山の洞窟の中で、アラーの啓示を受けたのでしょ。

(木原二郎) 修道院の流れも、原型というのが山伏の動きに見ることができると思います。

(吉田陽一) 今日見たDVDの中で、修行していて、子ども達が泣いたりしていましたね。空腹などいろんな精神状態の中で、トランス状態になるのではないかと思うのですが。先生何回か修行されたとのことですが、トランス状態に入られたことはあるのでしょうか？

(長野先生) 大峰山の時に一度ありました。大峰山は3回行きました。そのときに、空腹と疲労でまいってしまいました。そのときに、長女が、25歳の時に西南学院大の学生の時に悪性リンパ腫でなくしたのですが、頑張れ、がんばれと応援してくれる面幻影が出てきました。そういうことがありました。ですから、人間は正常な意識のときは、こんなことはありませんけど、限界に達した場合にはなるのでは。

それから、大峰山の西のノゾキというところで3回経験があるのですが、比高100m以上の高さの断崖にザイル一本で吊り下げられる。それは怖いですよ。1回目は眼が開けられません。つぶったままですよ。そして、大先達が「しっかり研究しなされや！」と言うんですよ。そして、「はい、はい！」ですよ。(「ハイしか言いようが無いではないですが」笑)「学会のためにつくしなされや！」大先達は人によっていろいろ言うんですよ。それが天の声のように聞こえるんですね。それが、ザイルがじっと固定していないんですよ。ズーッと緩めたりするんですよ。(「そうですか、たまらんですね」笑)

2回目の時はだいぶ度胸がついていました。ときどき眼を開けて谷底が見えました。3回目の時はばっちり開けて見えます。そして、不思議な現象があったんですよ。今でも眼が悪いのですが、近乱視で、遠いところが普通ボーっとしています。断崖は谷底まで100mはゆうにあるのですが、断崖といってもオーバーハングしています。なのに3回目の時は、谷底の樹

木の枝葉の一枚一枚がバッチリ見えたのですよ。不思議だなと思いました。そのあと、歩きながら、横の大阪から来た八百屋さんの店主だという行者さんにそのことを話しました。そして、実は私もそうでしたと。眼が悪いけど、つるされた時バッチリ見えましたがどうしてでしょうかと。

おそらく、人間が生命の危険に直面した時、人間が本来持っている感覚が、蘇えることが瞬間的にあるのではないかと思いました。アフリカの原住民なんかテレビで遠いところがよく見えるなどといったことが紹介されていますが。本来人間は鋭敏な感覚、動物的な感覚を原始時代には持っていたのでしょ。そがだんだんだんだん麻痺してしまって、けれども、何かトレーニングした場合に、ぽっと瞬間的に蘇える時があるのではないかと思います。

わたしはスポーツ選手でも芸能人でも、みんなに感動を与えるようなプレーをしたり、演技をしたり、あるいは歌唱力を発揮したりするというのは、ものすごい練習をしているとおもいます。それはやっぱり、修行だと思う。素人ではとてもプロのピッチャーが投げた球は打てませんね。だけど、王選手はボールが止まって見えると言うのです。投げた球が静止して見えると。だから、打てるんだと。そういうのはやっぱり、練習、つまり修行でしょ。ものすごい人のやらないような練習。それによって自分が持っている鋭敏な感覚をプロになれば蘇えらせている。やっぱりそういうことは修行に通じる、というよりも、現代人のプロが修行（練習や実戦）によって、自分の才能を発揮させているのではないか、と思います。

（玉井）なんか聞きだしたら、きりが無いのですが、よろしいでしょうか？ なかなか聞けない話が続いているのですが、先生、時間過ぎてしまいました。本当に長い時間、ありがとうございました。拍手で締めくくりとさせていただきたいと思います。（拍手）

最後に、カップ塾の顧問・アドバイザーをお願いしています九州大学の施先生に一言いただけますでしょうか？ 施先生は政治哲学の専門でいらっしゃるしまして、今日も別件があるという中、お忙しい時間を割いて、お越しいただいています。

（施先生）今日はありがとうございました。大変勉強になりました。いま九大が移転しているなかで、疑問に思っていることは、土地と人間の結びつきを軽視しすぎてないかなということ。つまり大学とか教育の場というのはあまり移転すべきではないのではと思っています。つまり場にいろんな人々の思いが残っていて、実は大学とかの教育も場の雰囲気感化されるところが多いのではないかと思います。私の学生に唐津東高校の卒業生がいるのですが、唐津東高校も唐津城の下にあった校舎を捨てて、駅の近くに移ったらしい。そういう話を聞くとだんだん人間と場とのつながりが失われて行っているのではという気がします。もちろんいろんな事情があって、移るのでしょうが、同じ移るときでも、場の記憶みたいなものをどうにか持って行くとか、受け継いでいくことをしないと、不自然な形になってしまうのではないかと、最近よく考えています。今日の長野先生のお話を伺いまして、やはり修験道というのも、場の中で、まとまって人間の精神というものが鍛えられる。そしてそれが自然な姿なのかなという風に考えさせられました。私少し勉強不足なのですが、いろいろと修験道に関して勉強してみたいと思いました。今日は本当にありがとうございました。

（玉井）以上で、終わらせていただきたいと思います。本当にありがとうございました。